

農林業における獣害防止に向けた捕獲技術の実証研究

令和5～7年度（国補：鳥獣被害防止総合対策交付金）

川島直通

三重県ではシカやイノシシといった大型哺乳類による農林業被害が長らく問題となっている。そのため、効率的な捕獲方法を明らかにし、各地で捕獲を推進していく必要がある。また、捕獲によって実際に生息密度がどの程度低減させることができるのか、もしくは低減した生息密度を維持するためにはどの程度の捕獲努力を続けていくべきかといったことを明らかにすることが、農林業被害の防止を進める上で重要であると考えられる。そこで本研究では、シカ等の農林業に被害を及ぼす獣の低コストで効率的な捕獲方法を検討するとともに、モデル地区内に自動撮影カメラを設置してシカ出没状況調査を行い、捕獲の効果検証を行う。

1. 低コストで効果的な誘引餌の使用方法的検討

シカを特異的に誘引できる誘引餌としてヘイキューブがあるが、特に夏季は頻繁に交換が必要なことに加え資材コストが比較的高く、捕獲者の負担となる。一方、鉋塩は餌交換頻度が少なく労務負担が少ない誘引餌であるが、効果に地域差や季節差があることがわかっている。そこで三重県内における鉋塩の誘引効果を検証した。調査地は伊賀市内の山林とし、令和6年5月から令和7年1月までの期間、鉋塩を調査地内の5か所に設置し、自動撮影カメラで誘引状況と採食状況を調査した。その結果、特に6月から9月までの期間はシカの出没頻度と採食頻度がともに高かったが、11月から翌年1月までの期間はシカの出没頻度が比較的低く、出没しても採食はほとんどみられなかったため、誘引効果は小さいもしくはほとんどないと考えられた。

2. 改良くくりワナの実証

小型・軽量で移動が容易なくくりワナはよく用いられる捕獲手法である。そのうち、押しバネ・ワイヤーガイド式のくくりワナは取り扱いや荷重調整が容易でかつ安価なため広く使用されているが、空はじきにより獣を取り逃がすことがしばしば発生する。そのため、これまでに空はじき防止の構造を有した押しバネ・ワイヤーガイド式のくくりワナ（以下、自作ワナ）を作製したが、空はじき防止のための有効性の検証が十分ではなかった。そこで自作ワナを用いて捕獲を行い、空はじき率を算出し課題を抽出するとともに、その結果をもとに改良と作動テストを実施することとした。令和6年度に自作ワナで実際にシカの捕獲を実施したところ、10回の作動のうち空はじきが1回発生した。自作ワナはまれに空はじきが発生すると考えられたため、自作ワナにさらに改良を施したワナ（改良自作ワナ）を作製した。自作ワナ、改良自作ワナ及び市販されている押しバネ・ワイヤーガイド式の複数のワナで屋内にて作動テストを実施したところ、改良自作ワナのみ空はじきが1度も発生しなかった。今後、野外にて実際にシカの捕獲に使用し、空はじき発生有無を確認する予定である。

3. モデル地区におけるシカ出現頻度の経時変化

伊賀市内の山林を調査地として、捕獲によりシカの出現頻度がどのように変化するかを検証した。調査地内には16台の自動撮影カメラが平成29年から設置されている。自動撮影カメラの撮影画像により、平成29年4月から令和7年3月までのシカの出現状況を調査した。その結果、捕獲圧の高かった平成29～30年度はシカ撮影頻度が大幅に低下した。一方、捕獲圧を下げた令和元年度以降、シカ撮影頻度が増加し、令和5年度まで高い状態を維持していた。令和6年10月以降は過年度の撮影頻度と比較して大幅に減少した。令和6年度には捕獲圧を上げたことがシカ撮影頻度の減少に影響している可能性が考えられた。